

昭和の 遺書

辺見じゅん ● 編



昭和の遺書

昭和六十二年八月十五月初版発行

昭和六十二年九月三十日三版発行

編者 辺見じゅん

発行者 角川春樹

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 営業部〇三―二三八―八五二―

編集部〇三―二三八―八四五―

振替口座東京三一―九五二〇八 千一〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan ISBN4-04-883221-2 C0095

昭和の遺書

目次

凡例

一、夕陽の戦野

(中国大陆)

七

二、南海に散る

(ソロモン諸島)

七四

三、烈日の野辺に

(ニューギニア・オーストラリア)

九八

四、戦場に父母、妻恋し

(アリュウシヤン・中、南部太平洋・米国)

一二八

五、夢捨てて出で征くわれは

(フィリピン・台湾・香港・南シナ海)

一八四

六、遥かなり故郷

(インド・ビルマ・ベトナム・マレーシア・インドネシア)

二八五

七、華と散る心

(硫黄島・沖縄)

三五〇

八、男子の本懐

(満州・朝鮮半島)

四〇三

九、いま果つるこの身にあれど

(樺太・シベリア)

四三〇

十、誓いと祈りと

(日本本土)

四五三

十一、海ゆかば

五一六

十二、還^{かえ}らざる出撃

五八八

解説・編者あとがき

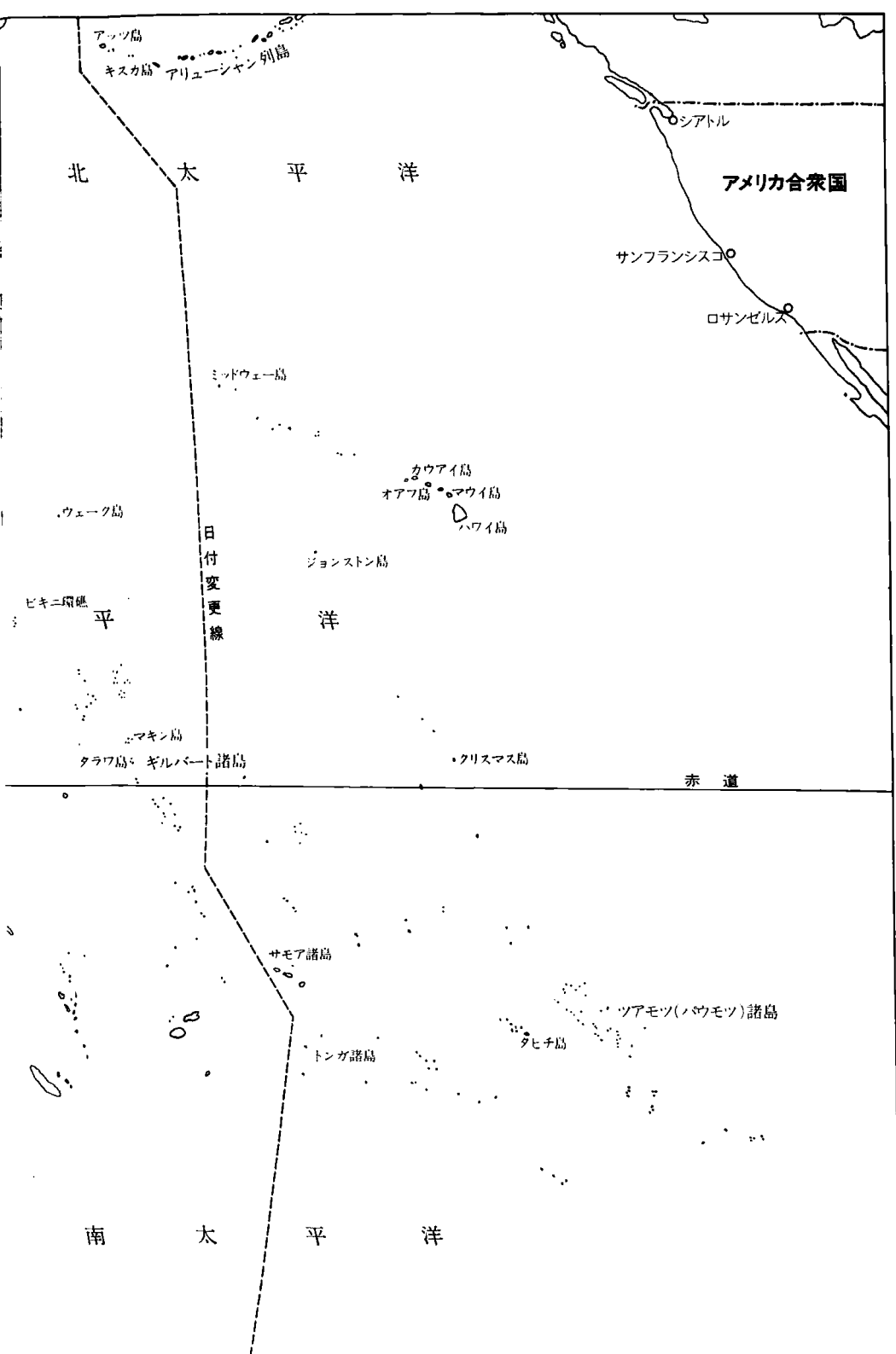
辺見じゅん

太平洋戦争戦域図

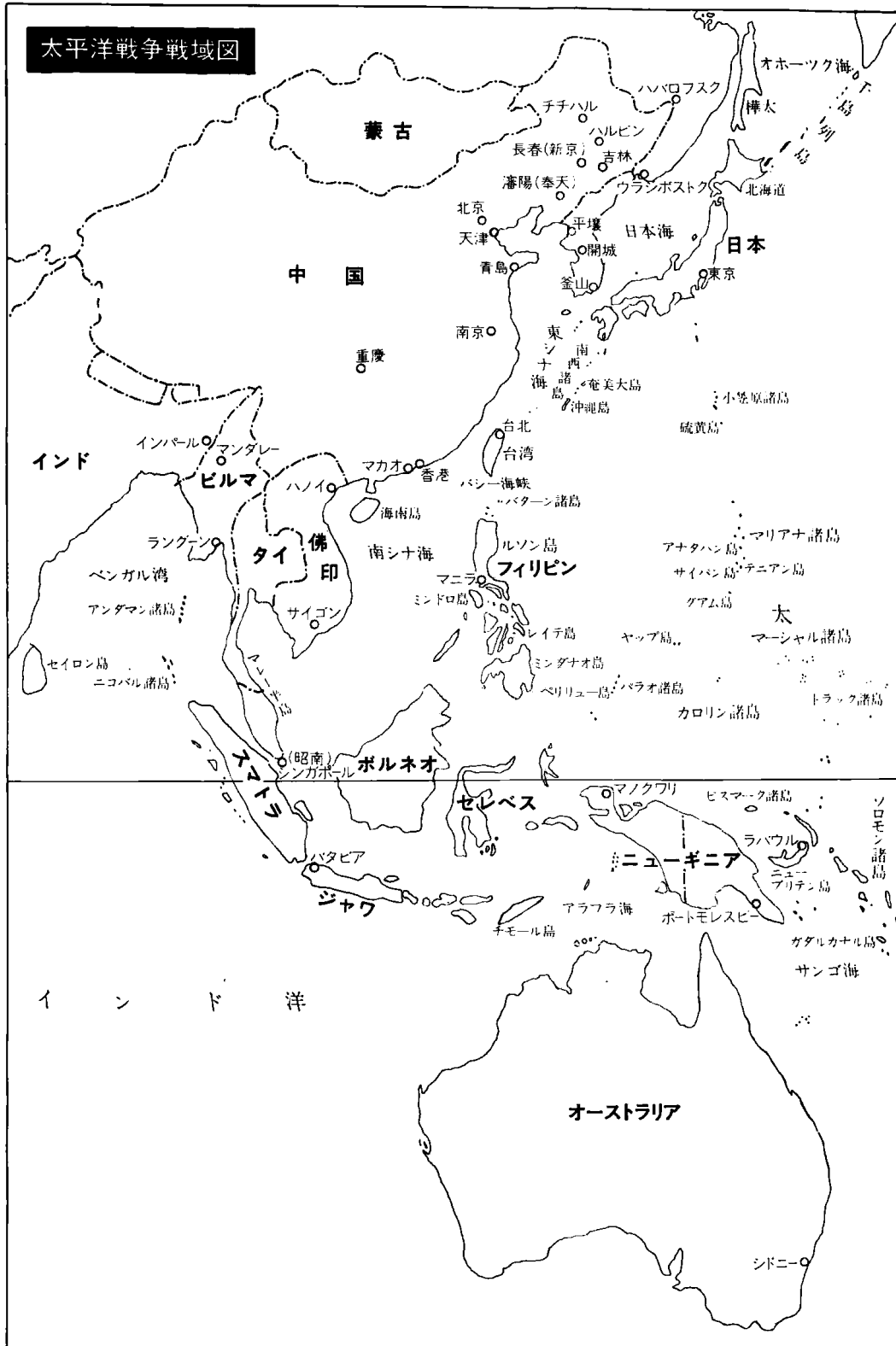
年表 昭和の大戦

「昭和の遺書」応募一覧

装丁 菊地信義



太平洋戦争戦域図



凡例

一、本書は、昭和六十一年夏、全国一般家庭より募集した、書簡・手記・日記などの「昭和の遺書」およそ九〇〇点の中から三七三点を選び、それぞれに、執筆者の略歴、執筆背景、内容、遺族の思い出・心境等に触れた、編者の解説を加えたものである。

選ばれた資料の執筆時期は、昭和十年代から二十年代にわたっている。

二、資料は、執筆者が戦没・死亡した地域別に章分けし、各章内の配列は、原則として死亡時期の順によった。ただし、十、十一、の二章は、地域によらず、内容別にまとめた。

三、各資料については、上段別組みで、執筆者の出身県、死亡当時の軍籍・職業、階級、死亡の時期・場所・年齢、および、執筆の場所・宛先・時期を、分かる限りにおいて明らかにした。

四、各資料の整理・編集に当たっては、次の作業を行った。

①資料は、全文の掲載を心がけたが、長すぎるものは一部を割愛、また、内容が私的記述にすぎる部分などはやむなく省略した。

②読みやすさを考慮し、改行・句読点・ルビの添加を適宜行った。

③かなづかい・用字は原文を尊重し、誤記、新旧かなづかいの混用などを改めずに残した箇所には、(ママ)を付した。

④判読不明の文字・箇所には、□を付した。

五、巻頭・巻末に、参考資料として、太平洋戦争戦域図、年表「昭和の大戦」、本企画への応募一覧を載せた。

一、夕陽の戦野

(中国大陆)

白井波留雄

東京都出身。

支那派遣加納部隊阿部隊、

陸軍一等兵。

昭和12年10月6日、

中国・上海小宅で、戦死。

31歳。

(一)日記

昭和12年9月

(二)(三)書簡

家族宛

昭和12年10月5日

(一)

9月27日

雨晴

此の日前の日(ママ)わ同じ。

もうれつに弾丸が来る。

敵五百メートル米に来る。

9月28日

晴

第一戦にて戦ふ。

生か？ 死か？

9月29日

晴

時午後5時10分前。地掘った穴の中にて書く。空に飛行、大砲、聴。今は5人やられた。

今の所生て居る。一人穴の中、敵は百五十米の所。愈夜になる。

9月30日

夕暮に雨

第一線より百米後に来る。12時頃大隊本部に来る。今は穴の中。時に午後6時5分、書く。夜しゆう有るみこみ。砲彈の音もうれつ。

今の所生てる。

午後6時7分。

10月3日

雪

午前2時戦氣じくした。夜しゆに行た。全く死あるのみ。銃丸は雨の如し。すさまじかつた。併し攻げきは失配した。今は全のぬれ鼠だ。生地ごくた。時8時45分。夜に行つて軍旗中隊となつた。十、十一、十二、中隊にて行く。

生か？ 死か？

10月4日

十、十一、十二、中隊攻撃も総て失配。他数の死者を出す。時8時30分、書く。後は命令待つのみ。□戦の地占はウ・ソソクリイク。□上にて平田君に合つた。実に懐しいもの。午後4時50分。こよし、後の事は頼む。6時頃であつた。車中の尺八は又よかつた。此の晩程楽しく眠たい日はなかつた。

10月5日

晴

生か。

楽しい朝が来た。今朝は初めてビールが渡った。今の所無事。皆、中隊長の元にて中喰(マユ)をした。其の時命令が出た。今晚の戦が最後である。もんだいのクリーイクを渡る。

こよし後の事はたのむぞ。(マユ)皆様によろしく。今は只、死あるのみ。死か。

(最後)

白井波留雄所有、白井こよしに渡して呉れ。

涙さらに無し。笑つて死ぬ。

(二)

君枝ちゃん大きくなつたらお母さんの言ふ事は良く聞ておりこをさんになつて呉れ。最後のお父さんのお頼(たのみ)ですよ。

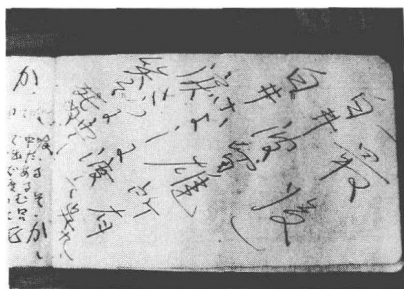
昭和十二年十月五日書

波留雄

(三)

白井こよし様

こよし、お前には色々心配を掛けて済なかつた。我ま、ばかし言つて全く済まぬ。許して呉れ。心より御礼を言ふ。子供の事は頼む。私の一生の言葉だ。優しい夫を持つて子供を



大事にしてやつて呉れ。頼みます。一生の御願だ。

昭和十二年十月五日

波留雄

(四)

八田の父母様、長い事御世話様になりました。こよしの事は御願致します。皆国のためです。

昭和十二年十月五日

波留雄



部隊全滅という瀛藻浜クリーク渡河戦の激戦に遭遇した一人の兵士の心情が、小さな手帳に緊迫した文面で記されている。「生か? 死か?」という文字が随所にみられる。塹壕の中で、次々と死んでいく戦友を見届け、最後の日記となった十月五日は「生か? 死か?」ではなく「死あるのみ」となる。そして、妻のこよしさんに「渡してくれ。笑つて死ぬ」と書き残した。

こよしさんは、白井波留雄さんに嫁いで三年。誕生を過ぎたばかりの長女・君枝さんを抱え、お腹の中には、父の顔を見ることができなかった次女の孝子さんがいた。夫を失ったこよしさんに追いうちをかけるように戦災で家が焼け、東京から丹波に疎開。夫の五十回忌まで、遺書となった手帳はこよしさんに大切にしまわれていた。

米本秀一

島根県出身。

浜田歩兵21聯隊第9中隊、

陸軍上等兵。

昭和十二年十一月八日、

中国・山西省太原で、戦死。

26歳。

その後御無沙汰致しまして恐入ります。

お父様始め皆様お褒り御座りませんか。私も今迄は無事です。御安神下さい。天津出發以來は、五十四名を二組に別けられ、自分等は十八名で大同と云ふ所から馬の警戒兵として行軍でやつて来ました。途中もどうやら無事に十四日夜やつと本隊到着。しかし聯隊本部は遠く右の方にゐて行かれず、取敢えず第四中隊に入り四五日過し、又第十中隊に入り

昭和12年10月28日

四五日過し、廿六日やつと第九中隊に編入されました。聯隊全部多数の死傷者で各中隊二百人近い兵隊が多いので四五十人、九中隊等は二十人余りしかありません。白露戦争以上の苦戦で、今攻撃してゐる山も十五六日目ですが仲々全部占領する事は出来ません。毎日多数の死傷者を出してゐます。夜も昼も土の穴の中で寒さにふるへ、米だけはわたりませんが缶詰の小さいのが一日分の副食、その他は何もわたりません。煙草は無くなる、水が悪いので腹はこわす、これが戦争かとしみじく感じさせられます。手紙もいつ出せるものかわかりませんが書いては見ます。小銃弾、砲弾が頭をかすめる中で書いてゐます。いつ果てる命やらとても生きて帰るあてはありません。この先いつ迄続くものか、只死のみを待つてゐます。しかしかねて覚悟の通り男の死場所だから国の為喜んで死んで行きます。

こんなに苦戦してゐやうと誰が知りませう。こゝの支那人はとてもがん強で、しかも武器もいゝものを持つてゐ、地の利はしめてゐるし、とても勇敢に抵抗します。今迄生きてゐられたのも亡きお母様や悦子のお加護、又お父様始め皆様のお祈念のお蔭と喜んでゐます。又いつ死ぬるともみ仏の子として生まれた有難さ、み仏のみに抱かれてお母様方の処へ行かれる事を喜んでゐます。お父様どうぞ御安神下さい。万に一つ無事でゐられたら又お便り致しますが、これが最後かとも思はれます。皆様どうぞ御大事にいつ迄もお健者で暮して下さい。自分が戦死して遺品が若し届きましたら時計は禧輔に、お守りは一切すぎ子にやつて下さい。無事な内に遺言にして書いて置きます。未少ないお父様をどうぞ、お大事に願ひます。この手紙は兄弟中にも見せて上げて下さい。又戦死の報が届きましたら別封を兄弟中に見せて下さい。お父様、兄さん、姉さんには別に書きません。死んだらこれが最後の書置だと思つて下さい。

ではお健者で皆様さようなら。

秀一

廿八日

お父様

外皆様

親類、近所の皆様に宜敷く。

北支の山西省で、小銃弾、砲弾が頭上をかすめる中で書かれた遺書。

遺書保存者の米本哲雄さんは甥。父の弟にあたる秀一さんの遺骨が還ってきたとき、小学校二年生だった。骨箱には奥歯が一本入っていたのを生々しく記憶している。二十八日付で書かれたこの手紙の十日後に太原城攻略戦において胸部貫通銃創を受け戦死。

桐生正雄

群馬県出身。

大湊海軍航空隊第3分隊、

海軍一等航空兵曹。

昭和12年11月9日、

中国・上海方面の江上で、

戦死。

25歳。

上海にて、

婚約者・絹子宛

昭和12年8月22日

取急ぎお知らせ迄。

十九日、揚子江の河口馬鞍群島に来ました。

二十日、二十一日と二回上海爆撃に行きました。上海は火災にて上空一面黒煙につまれております。

昨日は南昌の停車場爆撃で、「レール」や待合室等の飛散する状況は、実に愉快で胸の溜えんが一ぺんに下ります。

昨日午後五時頃敵の飛行機が九機我が飛行基地を爆撃に来ましたが、ちつともあたりません。安心したものです。

これから毎日爆撃に行きます。

私も元気で戦っておりますから御安心下さい。

毎日天気良くめぐまれております。

今佐世保に帰る飛行艇ていがあるので取急ぎ書きましたので、乱文お許下さい。

皆様によろしく。

八月二十二日

正雄

絹子様

内地へ帰る飛行艇ていが出る前の寸時を惜しんで婚約者の絹子さんに書き送った。将来をともにと約束しながら、桐生正雄さんは帰らぬ人となった。絹子さんは「昭和十八年、両親より霊を護るまもるためにと強要され」、正雄さんの弟の義雄さんに嫁いだ。故人の霊を慰めることができれば、と五十回忌を迎えた婚約者の遺書を送ってきてくれた。

本戸甚一

茨城県出身。

水戸聯隊、

陸軍伍長。

昭和12年12月16日、

中国・南京郊外で、戦傷死。

24歳。

野戦病院にて、

妻・トヨ宛

昭和12年12月14日

常磐公園ときわに於て未知な未来に向つて別れてより早や二ヶ月、想えば永い御無沙汰ごぶさたでしたね。我々ははかくしく運送（マヤ）の航々をを歎じつ、も無事に南支那杭州湾上の一角に上陸した事は先便ですすでに御承知の事と思ひます。

大きな平和の為には大なる苦痛があります。住民は逃亡し、家は破壊され、道路にクリークに点々と支那兵の散乱するあり。初めて見る我々にはたゞ悲惨を感じしむるのみです。食事はもとより補給のつきようはありません。猛裂（マヤ）な強行軍合間（マヤ）に南京米（マヤ）（半搗はんつき）の茶色のやつ、時には玄米、なつばや塩、味噌みそなどをかつさらい、手にぶら下げてはそれがその日の食料です。

行けどもく遠いく南京、どうぞ地図で見て下さい。九牛の一毛をわたる気持にてたゞく歩み続けて来ました。その間毎日操返さるゝ戦斗、時には打破り、時には頑強にて後

退する事もありました。

宜興のさきの橋梁^{きようりょう}守備に我々二大隊が選拔されし。六里ばかりも前進し息を殺して守備してゐると何も知らない敵兵はノコリ／＼とやつて来る。早速重機は正面に用意された、軽機小銃は猫の様に後に廻つた。たちまち起る一斉射撃、敵はまるで扇風機の口へぶちまけたごまの様に吹き散つた。初めての山の様な戦利品をかゝへ我々はたゞ万才を連呼した。しかし十二月八日には俺も武運^{ぶくわん}つたなく遂に腹に一弾を受けてしまつた。然し弾はかたよつてゐるし俺が頑張り丈^{だけ}でもきつと生き通す決心でゐる。タカは大きくなつたゞらう。あのクリ／＼した顔を一回なぞて見たい。皆によろしく。

秋本や青野家にもどうぞよろしく。

十二月十四日

草々

甚一

トヨ殿

昭和十二年十二月、日本軍の南京攻略の戦闘中に負傷、野戦病院の仮ベッドにて手当てもできず戦傷死。死の三日前の十二月十四日、妻宛に口述したものを衛生兵の上田裕さんが記述し、茨城県の遺族宛に送った。

遺書に添えられていた上田裕さん（中支派遣末松部隊衛生兵第四分隊）の手紙。

「本戸甚一君の傷は右側の下腹部を前面より背面に向つた貫通銃創です。病院の位置が第一線に間近な事と開腹手術器がなきたため、やむなく南京入城を他の二百余の傷者と共に待つたのです。」

宮田久雄

兵庫県出身。

鳥取歩兵第40聯隊第10中隊、

陸軍歩兵二等兵。

昭和13年4月24日、

中國・德州で、戦死。

21歳。

德州にて、

母、妹宛

昭和×年10月8日

しかし、甚一君はあの疼痛にも凄い程の元気を以て頑張り通しました。苦痛の折には側に腰かけてゐる私の手を強く握り、痛みの遠のいた時には別途の手紙を口述し、家の事など話してくれました。南京の陥落、そして南京に護送し手術、これが二人ですこしも早からん事を神に願ひましたのに、予備病院開設、護送の一日前、十六日午前零時五十分に逝つたのでした」

遺書代筆の上田裕さんの消息は不明。

文中に「タカ」と書かれている富岡孝子さんが父の遺書を初めて見たのは三十三回忌のお盆のころ。桐箱に納めてあった。

「悲しくて、全身をふるわせて読みました。この平和がいかに大きく、人の犠牲のもとにあるかがわかりました」

お母さん、富ちや元氣で御暮しですか。遠き北支より御伺ひ致します。自分も不思議に命を長らへて元氣で暮してゐますから心配はせずに御暮し下さい。

九月廿一日夜より十師までは滄洲総攻撃に向いました。四〇聯隊は正面より、なか／＼の苦戦でした。本当に弾丸にあたるのがあたりまへの様なほど敵は日本軍のせめ寄るのを恐れてうちました。

丁度自分は決死的鉄条網の破壊班を命ぜられ、友軍最前線に向いました。今思い出せば本当に恐しい話です。敵方十五米程近寄りました時、共に進んでゐました三名の中一名上等兵は戦死、近寄つて水を吞ませました。唯くるしんで其の場に倒れてしまいました。我等はなほも前進せんと致しました。余り多山のたまが来るのでどうする事も出来ません。又すぐ其のそばから長さ六米深さ四米余りの水壕になつてゐるので、渡る事が出来ません。その向うに鉄条網があり、すぐそのうしろに敵の陣地で穴をほり盛んにうつつてゐるのです。